

平成30年9月4日現在

機関番号：31307

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2017

課題番号：26370287

研究課題名(和文) 博物学とイギリス・ロマン主義文化

研究課題名(英文) Natural History and British Romantic Culture

研究代表者

鈴木 雅之 (Suzuki, Masashi)

宮城学院女子大学・学芸学部・教授

研究者番号：50091195

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：18・19世紀に確立した博物学および近代生物学や生理学等から生まれた多様な言説を、広い意味での表象という視点から、18世紀前半から19世紀半ばにかけてのイギリス・ロマン主義時代の文化(文学、哲学、政治、宗教、視覚芸術等)の中に探った。このような観点から、第一次資料の詳細な分析をもとに領域横断的な考察を行うことにより、断片的で細分化されたものとしてとらえられがちな当時の文化の諸相を新たな視点で読み解くと共に、それらの諸相が、緊密な相互依存の編み目を形成している様子を明らかにした。

研究成果の概要(英文)：A large variety of discourses on natural history including biology and physiology were produced in the eighteenth- and nineteenth-century Britain. In the present research an attempt was made to search for natural history discourses which are in particular incorporated into literature, philosophy, politics, religion and visual culture during the British Romantic period. And a closer analysis of their primary sources suggested that a new perspective more fundamental and integrated should be given to represent and mediate apparently fragmented culture of the British Romantic period.

研究分野：イギリス文学・文化

キーワード：博物学 分類学 生命科学的言説 顕微鏡の表象 植物学 昆虫学 蒐集 システム

## 1. 研究開始当初の背景

博物学およびそこから発展した近代生物学(生命科学など)が、18世紀前半～19世紀半ばにかけてのイギリス・ロマン主義文学・文化(哲学、政治、宗教、視覚芸術等)に及ぼした影響は、計り知れないものがある。しかしこれまでの研究の多くは、博物学といえば、顕花植物への関心や植物の二名式命名法や性体系等のみを取り上げるにとどまるなどきわめて限定的であり、それらへの関心が個別作家や詩人等の本質にどう深く関与しているかあるいは他の博物学的言説等とどう絡み合うのかを追究した研究は手薄である。博物学的言説の根本的特徴は、Michael Foucault (*Les mots et les choses*, 1966)も指摘したように、「分類」学であり、それを支える「体系」と「方法」にあった。さらに重要なのは、イギリス・ロマン主義時代において盛んに議論された生命論、生氣論、有機体論、生殖論、怪物・畸形論等が、実は、博物学から発展した近代生物学を出自とするものであったことである。しかしながら、これまでの先行研究においては、双方の関連性を踏まえることなく個別議論を重ねるために相互の関連性を見極めることができず、その結果、個々のテキストの考察もきわめて洞察を欠くものとなった。

## 2. 研究の目的

本研究は、18・19世紀に確立した博物学および近代生物学や生理学等から生まれた多様な言説を、広い意味での表象という視点から18世紀前半～19世紀半ばにかけてのイギリス・ロマン主義時代の文学・文化(哲学、政治、宗教、視覚芸術等)の中に探ることを目的とする。

### (1) 博物学的言説

本研究では、まず、イギリス・ロマン主義時代における博物学的言説を、とくに博物学的言説の特徴—「蒐集」「分類」「体系」「方法」「特徴」等—toに焦点をあて、その科学的・歴史的・宗教的背景を明らかにする。そのた

めに17世紀イギリス博物学の創始者John Ray, *The Wisdom of God Manifested in the Works of the Creation* (1691)やイギリス・ロマン主義時代に英訳(抄訳を含む)を通じて広く読まれたCarl von Linné, *System of Vegetables, According to their Classes Genera Orders Species with their Characters and Differences*. In two volumes. (1783)等を精読し、博物学的言説の特徴を明らかにする。

### (2) 生物学的言説

博物学から派生した生物学的言説(生命論、生氣論、有機体論、生殖論、怪物・畸形論)の科学的・歴史的・宗教的背景を探り、博物学との関係を明らかにする。ここで重要な人物はRobert Hookeであり、彼の顕微鏡による自然研究 *Micrographia: or some Physiological Descriptions of Minute Bodies made by Magnifying Glasses with Observations and Inquiries thereupon* (1665) は、生物学的言説研究の原点をなすことを示す。Hookeのこの著作を震源地として18世紀から19世紀にかけて多量に産出された精密な図版と視覚文化との関連の考察を深める。

### (3) 博物学的・生物学的言説の周辺領域への影響

博物学的・生物学的言説が、18世紀前半から19世紀半ばにかけてのイギリス・ロマン主義時代の文学・文化(哲学、政治、宗教、視覚芸術等)に深く浸透しまた共振していたことを明らかにする。

## 3. 研究の方法

博物学的言説・図版や生物学的言説・顕微鏡的表象の影響および内的関連性を、第一次資料を踏まえて領域横断的にイギリス・ロマン主義時代の文化の諸領域に探る。そのためにComte Georges Louis Leclerc de Buffon (*The Natural History of Animals, Vegetables and Minerals, with the Theory of the Earth in General*, 1775-76他), Joseph Pitton de Tournefort (*The Compleat Herbal: or, the Botanical Institutions of*

Mr. Tournefort, 1716-30), Erasmus Darwin (*The Botanic Garden*, In two parts, 1799)等を精読し、その多様な基本的主題・モチーフを浮き彫りにする。

18世紀の生物学において、おびただしい数と量の名づけがたき異形の生命体（バクテリアや細菌等）その多くは博物学の秩序を侵犯しかねないものであったが発見されたのも、顕微鏡の存在なしではあり得なかった。細菌や微生物に関する顕微鏡的言説・図版に注目しつつ、この時代の文学、哲学、思想、政治・宗教パンフレットや美術批評等に伺われる、とくに生物学に関わる言説を詳細に分析し個々の特質を明らかにする。当時出版された本研究課題にとって必須の文献としては John Turberville Needham, *An Account of some New Microscopical Discoveries* (1745); *Observations upon the generation, composition, and decomposition of animal and vegetable substances* (1799), John Ellis, *The Natural History of Many Curious and Uncommon Zoophytes* (1786), Henry Baker, *Microscope Made Easy* (1769); *Employment for the Microscope* (1764), George Adams, *Micrographia Illustrata*, (1746), Erasmus Darwin, *Zoonomia, or, the Laws of Organic Life* (1796)等である。これらの精読を通して、博物学的言説と生物学的言説（とくに生命科学）との関連を明らかにする。図版と視覚文化の関連もさらに考察を深める。

そうした上で、博物学的・生物学的言説が18世紀前半～19世紀半ばにかけてのイギリス・ロマン主義時代の文学・文化（哲学、政治、宗教、視覚芸術等）に深く浸透しまた共振していたことを明らかにする。

上記の文献に付された図版を入手する。他の図版も関連する視覚資料として可能な限り多数入手し、博物学と視覚文化との関係を読解する。資料等の整理には院生を雇う。

イギリスへ資料収集に出かけ文献の充実をはかり、また関連学会等に出席し情報の交換

を行う。これとは別に国内にない文献は大英図書館、ケンブリッジ大学図書館、オックスフォード大学図書館、ロンドン大学図書館、その他関連研究所等から、マイクロフィルム形で取り寄せ、コピー・製本し読みやすい形にする。ECCO(Eighteenth-Century Collection Online)にアクセスし、USBメモリ等に蓄積しコピーする。

博物学的言説に関する研究書や論文、関連ジャーナルを渉猟し精読する。

入手したデータや解析した結果を主題・項目ごとにまとめ、必要に応じてコンピュータ入力をする。

#### 4．研究成果

博物学的言説の特徴として「体系」つまり「システム」がある。必須文献としてWilliam Smellie, *The Philosophy of Natural Philosophy* (1791), James Lee, *An Introduction to botany, containing an explanation of the theory of that science* (1797), Carl von Linné, *Characteres generum plantarum*, 1793; *A System of Vegetables according to their classes, genera, orders species with their characters and differences* (1783), Joseph Pitton de Tournefort, *The Compleat Herbal: or, the botanical institutions of Mr. Tournefort* (1716-30), Comte Georges Louis Leclerc de Buffon, *The Natural History of animals, Vegetables, and minerals* (1775-76)などがある。これらの著作を精読することで分類と蒐集の学としての、システムとしてのLinné博物学の特徴を明らかにした。

博物学の影響を受けたWilliam Blake (1757-1827)は*A Descriptive Catalogue* (1809)の中で星を数えたSir Isaac Newton (1642-1727)、植物を数えたCarl von Linné (1707-78)と並列して人間の種類を数えた人物としてGeoffrey Chaucer (c. 1343-1400)を挙げた。彼の*The Canterbury Tales*の“General Introduction”を念頭に置いてのことである。18世紀を代表する

博物学者Linnéによる植物分類体系は、1735年に出版の処女作とあって良い*Systema Naturae* (1735)の中で、自然の三界、すなわち動物界・植物界・鉱物界の体系化となって現れた。この著作の影響をもちうけたBlakeは、同様の体系思考/志向をChaucerによる「人物/キャラクター」造型の中に発見した。この視点つまりChaucer=博物学者という視点を生かしたのがBlake作品“Chaucers Canterbury Pilgrims” (テンペラ画、銅版画)であった。

BlakeはChaucerをNewtonやとくに植物を数えたLinnéと並列して「チャーサーは人間のclasses(種類)を数えた」人物と呼んだ。“classes”は植物学で「綱」を意味する。上記引用箇所が続いてブレイクは、“species”(種)や“varieties”(変種)といった植物学的分類用語を鍵語として「性格」(キャラクター)論を展開していることに改めて注目した。つまりBlakeはChaucerの人間(キャラクター)の認識の方法には、リンネ的植物学的分類思考との近似性あるいは共振関係があると見て取ったのである。植物学のみならず観相学もまたこの時代の学問であった。顔の表情から人間を「分類」し「蒐集」するのが観相学でありその理論的背景には博物学があった。スイスの神学者Johan Caspar Lavater(1741-1801)の*Physiognomische Fragmente* (1775-78)がヨーロッパ文化に及ぼした影響は計り知れない

博物学関連と生物学なかでも生命科学に関する文献を渉猟し精読した。

1664年に出版されたHenry Power(1623-68)の*Experimental Philosophy*は、顕微鏡、水銀、磁気それぞれに関する“New Experiments”観察を“In Three Books”に纏めたものである。とくにノミ、虱、キリギリス、ケシの実、ヤツメウナギ等、合わせて51もの“Microscopical Observations”からなる第1部は、本書のほぼ半分を占め「もっとも独創的な部分」として、博物学における顕微鏡的

眼の歴史を探る上で重要な文献のひとつとなった。*Experimental Philosophy*の“The Preface”においてPowerは、“Dioptrical Glasses”の歴史を辿った後、顕微鏡は近代の誇るべき発明であるという認識を示す。伝統か進歩かという新旧論争では明らかに「新」の立場を擁護するパワーは、顕微鏡を「旧」に対する「新」の優位を、「自然」に対する「人為」の優位を証明するものとして称揚した。

Powerが“the minutest things”と呼んだものを、*Experimental Philosophy*の翌年1665年にRobert Hooke(1635-1703)は*Micrographia*の“The Preface”中で“Particulars”と言い換えた。こうして対象物の形状の忠実で詳細な文字による「記述」と118点の細密で正確な「図版」からなるHookeの*Micrographia*は、博物学に多大な影響を与えた。PowerはHookeの重要な先駆者のひとりであったし、以降、「微細」は「顕微鏡的眼」と共に、PowerやHookeらから派生した顕微鏡的語彙としてLinnéらによる蒐集と分類の学問と結びつき博物学において中心的役割を果たし、Charlotte SmithやJohn Ruskin(1819-1900)らに受け継がれた。

博物学のこうした19世紀の生物学・生命科学への流れを、Louis Joblot, *Unfusoria and Unfusion of Royal Anemones*(1718), John Thelwall, “An Essay Towards a Definition of Animal Vitality”(1793), Robert William, *On Vaccine Inoculation* (1806), John Hill, *Essays in Natural History and Philosophy. Containing a Series of Discoveries, by the Assistance of Microscopes* (1752), S. T. Coleridge, *Theory of Life* (1812)に跡づけた。

William Blakeの神話世界の中核をなす鍵イメージである“polype”をめぐる言説としてHenry Baker, *An Attempt towards Natural History of the Polype* (1743)やスイスの博物学者Abraham Trembleyによる*Mémoires pour servir*

à l'histoire d'un genre de polypes d'eau douce

(1744)、Trembley 自身が王立協会で行った一連のhydra に関する報告書などは、欠くことの出来ない文献である。Philosophical Transactions に掲載された生命科学に関する論文や実験観察報告、とくに細胞病理学に関する論文を精読した。

顕微鏡研究書Catherine Wilson, *The Invisible World: Early Modern Philosophy and the Invention of the Microscope* (1995)やMarian Fournier, *The Fabric of Life: Microscopy in the Seventeenth Century* (1996)は、顕微鏡研究史をコンパクトに記述した優れた研究書であり、本研究課題を追究するさいの貴重な補助となった。

これと並行してイギリス・ロマン主義文学なかでもChristopher Smart (*Jubilate Agno*, 1758-63), Blake (後期預言書*The Four Zoas*, 1797; *Milton*, 1804; *Jerusalem*, 1804), Coleridge (*Notebooks*), Wordsworth (*Poems in Two Volumes*, 1807)を博物学的言説・生命科学的言説の視点から捉え直した。Blake 作品の分類学的特徴および細胞病理学からの影響Wordsworth が上記作品に付した序文に見られる文学ジャンルと分類学へのこだわり等々、ここにあげた詩人たちが本研究課題とどのような仕方で相互照応・参照もしくは並列的關係を結んでいるのかを詳しく考察した。

考察の対象をさらに、Adam Smith, Erasmus Darwin やWilliam Wilberforce の宗教的政治的パンフレット、Sir Joshua Reynolds の美術批評等にも拡大した。文学では、Charlotte Smith による植物学や昆虫学・鳥学などの知識を駆使した少年少女むけの博物誌*Conversations Introducing Poetry* (1804), *A Natural History of Birds* (1807)など、これまで先行研究の少ない作品を本研究課題の視点から精読した。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 5 件)

1. Suzuki Masashi with Steve Clark. “Basic English Revisited: I. A. Richard’s Legacy in the Japanese English Classroom.” *The Liberlit Journal of Teaching Literature*. Issue 1. August 2014. No pagination. Online Journal
2. 鈴木雅之. 「戦争、痕跡、芸術の起源 フェリシア・ヘマンズとワーターロー詩」『試論』第 50 集. 2015 年 9 月. 1-19 頁
3. 鈴木雅之. 「イギリス・ロマン主義時代の『古典』観」逸身喜一郎・田邊玲子・身崎壽編著『古典について、冷静に考えてみました』岩波書店、2016 年 9 月. 61-78 頁.
4. 鈴木雅之. 「顕微鏡的博物学とシャーロット・スミス 『詩の手ほどきについての会話集』(1804)を中心に」『知の冒険 イギリス・ロマン派文学を読み解く』音羽書房鶴見書店. 2017 年 3 月. 256-74 頁.
5. 鈴木雅之. 「蒐集・分類された巡礼たち 《チョーサーのカンタベリーへの巡礼者》を読む」『英文学会誌』第 45 号. 宮城学院女子大学英文学会. 2017 年 3 月. 27-54 頁.

〔学会発表〕(計 6 件)

1. 鈴木 雅之. 「イギリス・ロマン主義時代の『古典』観. 日本学術会議、言語・文学委員会、古典文化と言語分科会. 2014 年 5 月.
2. 鈴木雅之. 「ブレイクの『システム』考 『個展作品解説目録』(1809)を中心に」イギリス・ロマン派学会第 40 回大会、奈良教育大学、2015 年 10 月.(招待)
3. 鈴木雅之. 「“Somewhat in the Shandean vein” ブレイクの“An Island in the Moon”」日本英文学会第 88 回大会. 京都大学. 2016 年 5 月 (招待)
4. Suzuki Masashi. “War and the Origin of Painting in Felicia Dorothea Hemans.” The Forty-Fifth Wordsworth Summer Conference. Rydal Hall, England. August 2016. (Invited)
5. 鈴木雅之. 「ウィリアム・ブレイクと古事物愛好主義 (Antiquarianism) 幻の大作《古代ブリトン人》(The Ancient Britons, 1809)を読む. シンポジウム「イギリス・ロマン派の想像力と古事物研究」第 10 回東北ロマン主義文学・文化研究会. 東北大学文学研究科. 2017 年 7 月.
6. 鈴木雅之. 「『見えざる世界の証明』 スヴェーデンボリ、ブレイク、エマソン」「トランスアトランティック・エコロジー 環境文学/思想の環流と変容」(科研費研究課題研究会. 同志社大学寒梅館 6 階会議室. 2018 年 3 月.(招待)

〔図書〕(計 1 件)

坂本武、内田勝、落合一樹、久野陽一、木戸好信、武田将明、加藤正人、鈴木雅之、原田範行、井石哲也. 『ローレンス・スターンの世界』. 開文社. 2018 年. 300 頁.

6 . 研究組織

(1)研究代表者

鈴木雅之 ( Suzuki Masashi )

宮城学院女子大学・学芸学部・教授

研究者番号：50091195